

## コロナ禍での先生の条件は「明るく・楽しく・元気よく」

—コロナ禍こそ「明るく元気で」が先生の条件—

開倫塾

塾長 林明夫

Q：コロナ禍こそ「明るく・楽しく・元気よく」が先生の条件ですか。

A：(1)「教育の成果を決定する要因」は、「本人の自覚」と「教師の力量」であると教えてくださった兵庫教育大学元学長の梶田叡一先生の「教師・学校・実践研究 人間教育の基盤を創る」金子書房 2005年8月25日刊を読み返して、「教師に求められるもの」として「明るく元気で」という文章に出会い、これだなと直感しました。(8ページ)

(2)ワクチン接種がようやく始まったとはいえ、インド型変異種の蔓延でいつ果てるかもしれないこのコロナ禍の中、先生に最も求められるのは「明るく元気で」であると考えます。

(3)私は、梶田先生の「明るく元気で」に「楽しく」を加え、「明るく・楽しく・元気よく」がコロナ禍で目指すべき先生の条件だと考えます。



Q：なぜですか。

A：(1)梶田先生は「教師は、子どもにしても保護者にしても、自分の出会う人の誰の心をも明るくしなければならない。何よりも、教師の仕事は、目の前の子どもの心を活性化するところから始まるのである。どんなに筋道を立てて学習課題の説明をしても、子どもの心が沈み込んでいたり、閉ざされていたりすれば、学習どころではない。

(2)教師は、何よりもまず、明るく元気で活気を開放する存在でなくてはならない。

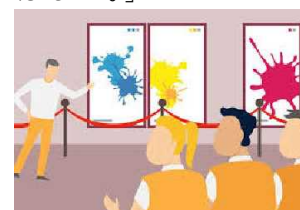
(3)さらには、保護者に理解してもらい、信頼してもらい、支援し協力してもらうためにも明るく元気でなくてはならない」と喝破しておられます。これは、学習塾にもぴったりあてはまります。



Q：現実には、暗い顔、冷たい顔、疲れ果てた顔の先生が少なくないようです。どうしたらよいのでしょうか。

A：(1)梶田先生は、「何とか時間を作って、美味しいものを食べ、(コロナ禍が明けたら)カラオケに行き、あるいは美術館を訪れ、音楽会に通うという習慣をつけてほしい。」

(2)また、「自分自身が没頭できる活動や趣味の世界を作ってほしい。学校の中だけが自分の世界であったり、教育界だけが自分の世界になったりするような意識や生活から自分自身を開放する努力をして



ほしい。」

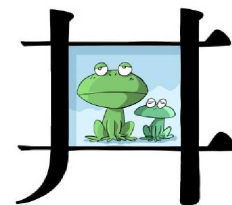
- (3)「そして、自分自身のストレス管理も含め、人間の心のダイナミクスについての洞察を深めていってほしい。人間が人間を教育するのである。教師が『明るく元気で』なくては、『心の教育』など、絵に描いた餅であろうし、何よりも心と心の触れ合いが実現しない」とおっしゃっておられます。(9 ページ)

Q：これは、そのまま学習塾・予備校・私立学校にもあてはまりそうですね。

A：(1)その通りです。特に学習塾・予備校の先生方は、一度配属された校舎や部署からの移動が少なく、言わば「井の中の蛙」「タコつぼ」化してしまう場合が多々あります。

(2)塾長は、様々な塾団体やロータリークラブ、ライオンズクラブ、キワニスクラブ、商工会議所、国際交流協会などに入り、地域の様々な有識者と交流し、自己研鑽の機会が多いですが、幹部やスタッフの皆様は、教材展示会や出版社や塾を訪れる学校の入試担当の先生ぐらいしか外部の方々とお会いする機会がないのが現実ではないでしょうか。

(3)まずは、より積極的・計画的に、各塾団体のイベントや全国学習塾協同組合などの教材展示会などへの参加を促すことが第一かと考えます。



Q：幹部やスタッフの先生方の視野を広げ、「明るく・楽しく・元気よく」の先生を育てる方法は他にありますか。

A：(1)私が一番おすすめするのは、地域の市・区・町・村の「商工会議所」や「商工会」、都道府県の「経営者協会」や「生産性本部」、各金融機関のお客様の会・国際交流協会などの「質の高いセミナー」など、勉強になるイベント・行事に、毎月 1 回以上、幹部やスタッフが参加するように促すことです。

(2)同じ団体の同じジャンル(分野)の会合に継続して参加し始めると、少しずつ顔見知りが増えてきます。会合が終わったら、必ず、顔見知りになった方とお茶を飲んで、意見交換・情報交換するよう、予め伝えておくことも大切です。

(3)私は、足利商工会議所、日本商工会議所、栃木県生産性本部、栃木県経営品質協議会、栃木県経営者協会、栃木県経済同友会、群馬県経済同友会、栃木県産業協議会などで、長年、研修プログラムづくりにも参加してきました。各団体とも、年間計画や一つ一つのプログラムの策定に心血を注ぎ、少しでも質のよいプログラムを、また、少しでも参加者同志の質の高い交流ができるプログラムをと、毎年、真剣に議論を重ねています。

\*是非、地元の様々な団体の教育研修プログラムを最大活用し、ご自分の組織の幹部やスタッフ全員が「明るく・楽しく・元気な」先生になるよう知恵を出し合ってください。

Q：一番のおすすめは何ですか。

A：こんな時期だからこそ、万全の感染防止対策を講じた上で、ごく少人数で、「100万人のクラシックライブコンサート」を開催することです。

バイオリンとピアノなどの若手プロの演奏家を定期的に、年何回か自塾にお招きし、ごく少人数のクラシックライブコンサートで「明るく・楽しく・元気な」先生づくりを行うのも一手です。HP をご覧ください。



Q：最後に一言どうぞ。

A：今月も先生方がお読みになれば必ずお役に立つ本をご紹介します。

(1)1冊目は、世界のための日本のこころセンター編「世界のための日本のこころ、その源流を探り未来を共創する、自ら学ぶための15の視点」かまくら春秋社 2021年4月30日刊です。

「世界のための日本のこころセンター」代表で、元通産官僚の土居征夫先生が心血を注いで監修の「日本型リベラルアーツ」として、①すべての学問のベースとして早くから学ぶべきもの(大学だけでなく、初中等教育段階から)②リーダーを役割と考え、すべての人が学ぶべきもの③「日本のこころ」の源流に立ち、世界に価値をもたらすものを目指しています。

(2)2冊目は、以前にもご紹介した辻本雅史著「『学び』の復権—模倣と習熟」岩波現代文庫、岩波書店 2012年3月16日刊です。本書を読み、貝原益軒著「大和俗訓」「養生訓・和俗童子訓」とともに岩波文庫をじっくりご一読頂くと、「日本のこころ」「日本の教育」の源流の理解がさらに深まります。学習塾・予備校・私立学校の先生に最適です。

(3)さらに、渋沢栄一自伝「雨夜譚(あまよがたり)」、幸田露伴著「渋沢栄一伝」とともに岩波文庫をお読みになると、明治維新や明治の世はどのように形づくられたのか、その源流が理解できます。(何回も紹介させて頂き恐縮です)



(4)岩波文庫のプレハーノフ著「歴史における個人の役割」いう小さな冊子が復刊されました。一人ひとりの尊い国を思う心が、明治維新を成し遂げ、大正・昭和・平成と引継ぎ、現代日本の礎をつくったのだと実感できます。コロナ禍真ただ中、何が自分の果たすべき役割なのかを考えるのに絶好の書です。是非、併せてお読みください。

(5)日本経済新聞に連載中の伊集院静作「ミチクサ先生」に併せて、夏目漱石の全作品を夏目漱石全集や岩波文庫などで腰を落ち着かせてじっくり読むのも、この時期、趣深いと考えます。

(6)読書で大切なのは、お気に入りの作家や学者、ジャンル(分野)を決めたら、その方の作品、そのジャンルの作品をコツコツ取り揃え、じっくり腰を据え、何年かけても全部読むこと。何回も読むこと。このような本格的読書が、コロナ禍で余り外出できない時期の過ごし方として、いいかもしれません。余りのめり込み過ぎると自分の考えがなくなってしまう、自分で考える力がなくなってしまうという意見もあります。しかし、「時空を超えた著者との対話」と考えれば、自分自身の考えがさらに深まるのではないかと考えます。



(7)話は変わりますが、昨年4月以降ほとんどの大学はオンラインでの授業になり、学生は毎回レポートを提出し続けています。2020年度と2021年度の大学生ほど、よく勉強している大学生はいません。大学で教える先生方も、毎回のオンライン授業の準備・質問への回答、全学生のレポート評価と、これほど授業を熱心に行った年はありません。大学事務局スタッフも、オンライン教育を支えるべくよくがんばっています。大学生の皆様、先生方、大学事務スタッフの皆様のがんばりを高く評価すると同時に、心からの感謝を国民の一人として申し上げます。ありがとうございました。



— 2021年6月11日記 —